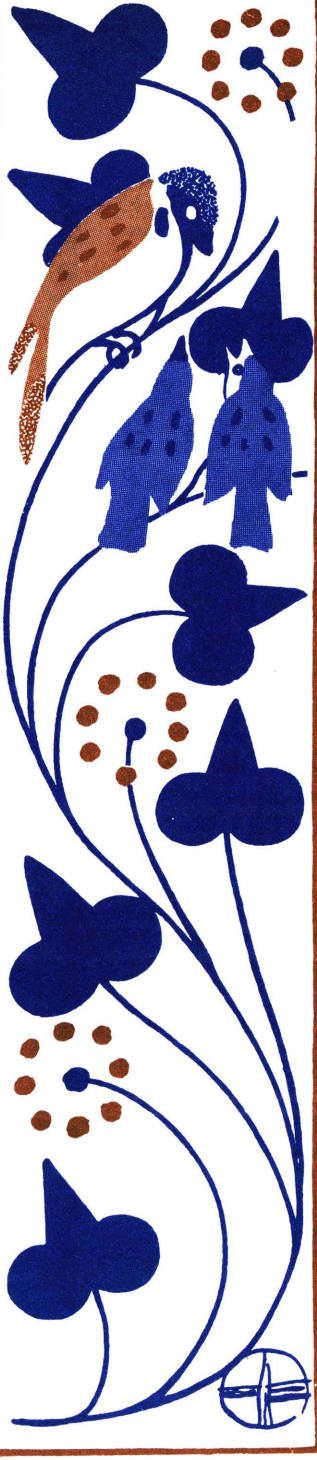
婦人と子ども

第十四卷
第五號



大正三年五月五日

フレーベル會

第十四卷第五號目次

哀悼の辭　乙竹岩造

フレーベルと現代思想　入澤宗壽

學齡前兒童の發達と教養　岡田みつ

『トム・ソーヤー』（二）　田中生

幼稚園日記（三）　倉橋惣三

保育入門（四）

四、幼稚園教育の原則

フレーベル自傳（第五回）　倉橋惣三譯

本誌定價

一冊郵稅共金拾壹錢　六冊前金郵稅共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢　郵券代用一割增

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に御送本致します。（振替口座東京一七二六六番）

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます
（庶務上保姆紹介に關する件をも含む）の御手紙は
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事務所宛
會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園內、雨森釧宛
本誌編輯の御用務（寄稿、廣告等）は東京府下代々木山谷一二四倉橋惣三宛

大正三年五月四日印刷
大正三年五月五日發行

東京府豐多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四
編輯兼發行者　倉橋惣三

東京市本所區番場町四番地
印刷者　平井登

東京市本所區番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場

東京市小石川區久堅町七十四番地
發行所　フレーベル會

兒童研究

社會の改善も、人類の向上も、文明の進歩も、國家の發展も、詮じつむれば、ただ善良の兒童を得るにありと言ふことになる。兒童を愛する國は興り、兒童を顧みざる國は亡ぶ、これは千古萬古變ることなき箴言である。兒童の研究は、ひとり教育家や、醫家に一任して置くべきものではない。世の父兄自ら研究すべき筈のものである。兒童の研究は卽ち我を愛し、家を愛し、國を愛し、人類を愛することになる、兒童のために最善を謀らざる家庭は、決して幸福を望むことは出來ぬ、我儕は何人も兒童の研究に興味を持たれんことを切に希望してやまないのである。

○會費半箇年分金九十錢　同一箇年分一圓八十錢○兒童研究は毎月一回二十五日發行○會員には無代頒布○見本金十五錢

東京市本郷區千駄木町五十番地

日本兒童學會

フレーベル會規則（抄）

第一條　本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノトス

第四條　會員ハ本會ノ經費トシテ一ケ月金拾錢ヲ醵出スベシ

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條　本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一、總會、每年十月之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

一、常會、每年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

尙每年四月廿一日特ニフレーベル紀念ノ爲メ會ヲ開ク

一、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス

一、雜誌發行、每月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

本會々長

中川謙二郎

本會幹事（イロハ順）

井村くに　池田トヨ　芳賀晴　坂內ミツ　和田實　和田くら　武井綱枝　岡部やす　倉橋惣三　安井哲　福田ふく　小向きみ　雨森釧　坂井ふで

本會評議員（イロハ順）

乙竹岩造氏　吉田熊次氏　田中ふさ氏
野口幽香氏　槇山榮次氏　藤井利譽氏
下田次郎氏　日田權一氏

本會客員（イロハ順）

伊澤脩二氏　巖谷季雄氏　岩谷英太郎氏
波多野貞之助氏　細川潤次郎氏　本間辰藏氏
戸野周次郎氏　大瀨甚太郎氏　奧好義氏
尾田信忠氏　大久保介壽氏　嘉納治五郎氏
唐澤光德氏　谷本富氏　高島平三郎氏
棚橋源太郎氏　多田房之輔氏　田中敬一氏
中島力造氏　中村五六氏　野尻精一氏
野上俊夫氏　黑田定治氏　久留島武彥氏
松本亦太郎氏　松本孝次郎氏　馬上孝太郎氏
富士川游氏　小西信八氏　淺岡一氏
雀部顯宜氏　櫻井光華氏　三島通良氏
篠田利英氏　東基吉氏　瀨川昌耆氏
尺秀三郎氏　菅原敎造氏

悲しきかな。　皇太后陛下には神靈とこしへに神去り給ひぬ。

畏きことながら渾然として玉の如き陛下の御聖德は、帝國臣民の母として常に慕ひ奉り仰き奉りたる處、或は儉素なる御日常を漏れ承はり、或は慈仁なる博愛救護の御惠澤を數へ、或は高雅なる御詞藻の數々を拜誦吟詠して、其のゆたかなる恩光に浴せざるものはあらざりき。

しかも悲しきかな。　今や神靈升遐し給ひて、麗容徽音再び拜せんよすがもなし。誠に誠に悲しいかな。

フレーベルと現代教育思想

（フレーベル紀念會に於ける講演）

東京高等師範學校教授　乙竹岩造

今日はフレーベル先生の誕生日で御座います。先生は一七八二年の四月二十一日に生れ、七十歳の天壽を保つて一八五二年の六月二十一日に亡くなられたのでございますから、此の二十一日といふ日は、二重の意義に於て紀念すべき日であります。此の日に、本會でフレーベル先生の紀念會を開かれますのは洵に意味の深い事と存じます。此の紀念會で私に、何か先生についてお話をするやうにとの事では御座いましたが折角お招きでございますから、喜んで參りました次第で御座います。それで、フレーベル先生の教育意見と現代の教育思想との關係とでもいふやうな點から見て、少しばかり感じました所をお話申上げて見やうと思ひます。

第一に、教育といふものは子弟の心身發達の程度に最よく適合せしめんければならぬといふが、フレーベル先生によつて頗る早く且つ最熱心に唱道せられて居ることでございます。有名な『人類教育論』の中にも、此事が所々に論ぜられて然かも此の書物は嬰兒、幼兒、男兒、女兒等に分けて、それ〴〵適切に論ぜられて居ります。殊に人間は嬰兒から兒童、兒童から少年、少年から青年、壯年と次第に發達するのであつて、嬰兒の時代を善く經過し無ければ、善き兒童には成長し無いし、良き兒童期を經過し無ければ、良き少年期には達し無いのである。それ故子供は、此世に生れると直ぐ

から正しき取扱ひを受けねばならぬので又各時期にそれ〴〵適當な敎育が大切なので、唯だ一足飛びに子供から大人にしやうとするのは無理な事であるといふことを諄々と說いてあります。フレーベル氏以前には時期に應じてそれ〴〵適切に敎育すると云ふ考がこれ程明確には表はれて居なかつたやうに思ひまするので、これが一つ注意すべき點であります。特に氏の如き嬰兒の中に母を失ひ幼兒としては繼母にかゝつて十分に注意せられては育てられず、又先生自らは、始めの妻にも後妻にも子供が無かつたといふやうな譯けで、直接子供に關係の薄かつた人から、斯樣な適切な考の明確に現はれて居りまする事は寧ろ不思議と思はれる程でありますが、不思議では無く、是れ一方からは氏の敎育の考は殆んど天禀であつたことを見るに足ると同時に、又他方からは、自己の辛い境遇苦がい經驗からしみ〴〵感せられた結果斯ういふ考に到達せられたことをも知るに足るのであります。

第二は、敎育の基礎を家庭に求めたこと、否な敎育は家庭と社會との間を結び付けるものであるとの考を確立したことであります。今日では學校は子供を家庭から預つて之れに敎育を加へて、社會に出すものであるといふことは誰れでも言ふことでありますが此の考がフレーベル氏に於ては明に立つて居つたのであります。また氏の考では、一方に於ては、子供の自己活動といふことを始終申して居るのでありますが、又之れと對立せしめて必ず共同生活といふことを言つて居るのであります。此の點に於ては、フレーベル氏は實にペスタロッチー氏とフイヒテ氏とを兩々相顧みて、その中間を進んで居るのでございます。蓋しペスタロッチは、敎育は母の部屋から發するものであるとして、之れが爲に母の本を作つたのであるし、フイヒテ氏は、敎育は國家社會の共同團體を基礎としていて行はれなければならぬとしてその國家敎

育論を立てたのであります。所がフレーベル氏は實に此の二つの考を省みて恰も其眞中を極く穩健に進んで居ります。例へば此の『人類教育論』を見ましても、常に父母を呼びかけて居るので、子を持つて居る兩親を讀者と見たてゝ居るが、之れと同時に社會の共同團體の一員として、立派な人間に仕上げるといふ事が、最大事な要件であることを主張して居ります。此の兩方の關係が極めて大事で、その考の具體案として、氏は前には國民教育所を建て、後には幼稚園を創めたのであります。卽ち氏の國民教育所や幼稚園は、一方には、實にペスタロッチー氏の家庭基本主義の發揮であると同時に他方には、又フイヒテの國家主義者の實現であります。斯くてペスタロッチ氏の『母の本』も世に實効を表はし、フイヒテ氏の國家教育論も茲に具體的となつたやうに思ひます。

第三は、勤學、創作を重ずる教育主義の發揮であります。近來、歐米孰れの國に於ても勤勞學校といふものが重要視せられて、創作の喜悅に訴へて子弟を導かなければならぬといふ考が著しく强く成つて來たやうでありますが、此考は、確かにフレーベル先生に因つて早くに唱導せられたのでございます。最もフレベール氏は勤學といふものは神の意志に叶ふものであるといふ立場に立つて居るのでありました。

此の本の序論にも二十一頁の所に「神は絕えず働らいて居るもので、神の考といふものは、仕事、行爲、創作である、然かもそれが永久に續いて居るものである。所が此の働くといふことは非常に深い意義をもつて居るものである」と云つて居る。此は教育を說くのに、常に人間的の方面と、神的の方面と、內部的の事と外部的の事、目に見える事と見えぬ事、身體と精神、現在と永久、といふ風にいつでも二つの方面を相對立せしめて說いて居るのでありますが、さて此の勤勞といふものは實に斯ういふ兩方面を結びつける所の唯一道であ

ると言つて最も之れを重じて居るのであります。最近の勤勞創作を主とする教育説は、フレーベル氏の樣な信心の考から出て居るものでは無いのでありますけれども、然かし兎に角その考の一源泉はフレーベル氏に發して居るといふ事は何人も認めなければなりません。

第四は、フレーベル先生の教育上の考は、國家主義、國民主義であつたといふ事でございます。これは教育事業の全體に亘つて、その動機その徑路を調べるとよく分かることであります。一體フレーベル先生は愛國心の强い人で、國家的觀念に滿ちた人でございました、それは、氏がルッツオー義勇兵に二度まで自ら進んでなつたことから、又その國民教育所の設計は、出陣中に段々と熟したことから、その他愈その教育所を開いた時に、自ら子供に教へた有樣を見ると、或は自分がした兵營生活の譚をして聽かせたり、或は軍歌を節面白く歌はせたりして居つた所などからしても之れを知るに足るのであります。これはフレーベル氏には終始一貫して居る所であつて、氏が前半生のカイラウ及びブルグドルフ等を中心とした教育事業を見ても、又氏が後半生のブランケンベルク時代及び遊説時代の活動を見ても共に分かることであります。然るに、つまらぬ誤解から、氏は社會主義を稱へるものゝやうに思はれ、國民教育所、幼稚園の如きも、當局から之を閉鎖を命ぜられると云ふやうに災危にあひましたが、これは人違ひであり、思ひ違ひであつた事は轍がて明になつたので御座いまして、氏が國家主義の人であると云ふ事は爭ふべからざる所でございます。

第五に、氏は幼兒教育事業の整頓者であつて、殊にその基礎を確實に建設した大恩人であるといふ點でございます。

一體幼兒を集めて之を教育するといふ事は、必ずしもフレーベル氏によつて始めて考へ出された

といふわけではない。既に一七七九年にオーバリン、ルイゼ・シエップラー夫人の二人によつて獨逸のスタインタールで創設せられ實行せられ、之につゞいて獨、英、佛、墺に於ても相當に行はれて居たのであります。また氏の幼兒園とは直接何等の關係なくして今日まで發達して居る幼兒敎育所もあります。曾て、ロンドンのある幼兒園を參觀いたしました時、その主任婦人が「私の幼兒園は、此度改良してフレーベルの主義によつてやる事にいたしました、お國の方は如何で御座います」と聞かれました。私は事の意外に驚きながら「私の國では、よほど以前からフレーベルの考によつてやつて居ります」と答へました。ロンドンの眞中で、こんな事をきくのは一寸豫想外でした。そは兎に角、斯ういふ譯けで、フレーベル氏は幼兒敎育事業の創始者ではないのでありますが、然かし、幼兒敎育事業に目的を定め、全敎育系統中に於けるその位置を明かにし、之を研究して之れに基礎を與へたといふことに至つては實にフレーベル先生の力であります。卽ち保育事業の創始者ではないが、その動かざる基礎となつた建設者であるといふの意味に於て、氏の功蹟は實に不朽で御座います。その上幼稚園といふ名は、氏が始めて考へ出した所で御承知の通り、ブランケンベルゲの山路を越える時、豫ねて幼兒保育所に何といふ名をつけたらよからうと頻りに考へて居たのであるが丁度此の時山の頂上に達した時ハタと手をうつて「幼稚園」にしやうと叫んで雀躍したといふ。あれが抑も始めであります。そしてその園と言つたのは二つの意義を含んで居るので一つは、小さい子供の居る所だから園といふのがよからうといふのと、二つには子供を園に育つ樹々に譬へたのと此の二つの意義と合せたのだと申すことでございます。そしてその名は、今なほ、世界各國に原語のまゝ用ゐられて居るのであります。

第六、氏は遊戯の敎育的價値の發揮者である事

でございます。此の『人類教育論』の中にも毎度論ぜられて居りまするので、例へば第一章概論の所にも「遊戯は、子供の自然の仕事であつて、且つその最好む所である。從つて子供の教養は遊戯によるのが一番よい」。と申して居りまするし、又第二章幼兒の所にも、「遊戯といふものは、子供の内部が、内部それ自身の必要から、自由に外に溢るゝ働きで、此の時期卽ち幼兒の頃に於ける純精神的の產物であると同時に、一生涯の生活に對して之れが手本たると同時に、うつしたのである。そして喜悅、自由、滿足、安心を與ふるもので外界世界と平和を保持するものである。遊戯に於て眞摯に、自立的に、安靜に、引續き、行つて居る子供は、他日眞摯に、自立的に、安靜に、引續きよく働く所の成人に成る」と申して居ります。一體幼兒の教育には遊戯が最もよいといふことは、昔から教育家の考へた所で又實際行はれた所でありまして、希臘の教師も羅馬の保姆もその重なる仕事としたのであります。けれどもそれは經驗的に、子供の遊戯は大切とせられて居るのですが、フレーベル氏に至つて、その眞の意義が發揮せられ、その陶冶的價値が明かにせられたのでございます。これは大なる卓見と言はなければなりますまい。一體遊戯の本質に就ては色々の考がございまするので、その重なるものを申しまするとシラー、スペンサーの諸氏は、遊戯を以て子供の蓄積せられたる勢力の發散と解して居りまするし、又、シヤラー、ラツアールスの諸氏は、遊戯を以て慰藉の行爲であると說いて居ります。兩方共一部の眞理を含んでは居るが、なほ不十分な說でありますグロース氏に至つては、遊戯を以て、天稟素質の練習若くは發展であると說いたのでありまして、これにはアーメント氏なども同意を表して居るので先づ尤もの見解であると思はれるのでございまするが、之れに近い考が已にフレーベル氏によつて已に述べられて居るのであります。遊戯の教育

的價値は近時ジャンバウル、コロッツア、グロースなど色々の人々の研究に因つて、だん〳〵と發揮せられて參つたのですが、それはフレーベル氏に負ふ所も實に少く無いのでは御座います。時に注意すべき一はフレーベル氏が玩具の最大切なるものは仲間の子供であるとして居る點であります。それは、極めて意味の深い着眼であると私は思ひます。それからその二は、所謂玩具は、複雜なもの必ずしも子供に重んぜらるゝのでは無い、子供にはそこいらに散らばつて居る竹の切れでも、棒のはしでもよいと云ふ見地から更らに考は恩物に進んだので御座います。

第七、教育の方法について活動を重んじて居る點であります。前にも申しました通り、フレーベル氏は子供天禀の自己活動を重んじ、之れを適當に發達せしむるといふ事が實に教育の要旨であるとしたのでございますから、唯だ教へ込むといふ樣な事を教養の本旨とはし無かつたので、寧ろ自己活動を十分に働かせ、よく之れを育て上げるといふを以て根本としたのであります。そこで氏は此の『人類教育論』の中にも多くの所に然かも同じ言葉を用ゐて繰り返へし〳〵之を申して居ります卽ちそれは、子供を助け後から付いて行くやうにして、育つべきであつて、こちらから型を定めて强いてそれにはめやうとしては不可ぬといふことでこれは毎度繰り返へして述べられて居ります。之れを以て見ても、フレーベル氏の教養の主義は子供の活動を重んずるのにあつて、猶ほ且つその方法は十分に之れを伸ばしめるやうに仕向けるにあつたことは、明かでございます。然るに年月を經るの久しき、後に成つては動もすると、形式に拘泥して、フレーベル氏の本統の考が忘れられ、所によつては大分に幼稚園の工合が變つて來た樣であります。是に於て乎近頃は彼のモンテソリー女史の幼兒教育法などが刷新運動のやうのやうに考へられるのでございませう。けれどもよく〳〵考

へて見ると或る意味から申せば、フレベール氏の教育方法の眞義の復活と見てもよいかと思はれます。尤もモンテッソリー女史の考はフレーベル氏の外ペスタロッチー、イタール、セガン諸氏の意見を酌んで出來たものではありますが、然かし子供の活動力を十分に伸ばさせやうとする所はフレーベル氏の考と頗る一致して居るのであります。

第八は、子供の衣食住の全般に渡つて、ひろく考が及んで居る點であります。人は幼稚園といへばやゝもすれば唯だ子供を遊ばす所と思つたり或は子供に物を教へる所と思つたりする傾が隨分ございますが、フレーベル先生は早く己に達觀して、氏の考は廣く幼兒教養の全般に渡つて居ることを認められるのであります。實に氏は、幼兒の食物、衣服、住居について周到なる注意を拂うて居ります。此の點に就てはロック氏などの教育法とその着眼が似て居るので頗る注意すべき所であります。今日では段々進んで來て殊に思慮ある兒童研究者は、兒童の食物、衣服、睡眠、住居など全般へ渡つても色々研究せられて居りますが、かう云ふ種類の研究に向つて、夙にヒントを與へて居る所のフレーベル氏の着眼は敬意を拂ふべきであると思ひます。

第九、職業的堪能や、藝術的陶冶の問題は近頃大分喧ましく言はれて參りましたが、さういふ考がフレーベル氏の教育思想には、明かにあつたといふ點でございます。現にフレーベル氏の言つて居る所を、よく調べて見まするとと、子供には子供が日常見聞する卑近自然の所からして、家事的の方面や職業的の事などを知らしめて、世の中の生活を理解せしむることを勸めて居るのが分かるのでございます。獨逸の國民幼稚園などでは今でもその預かつて居る所の子供の將來を考へて、遊戯でも何でもさういふ方面の注意を相當に加へて居るやうであります。これはその幼稚園の內容卽ち子供の身分やなどによつて、違ふべきでありますか

ら一概には決して申されませんが、それ〴〵適切なる注意は必要なことと存じます。

第十、最後にフレーベル氏の教育意見の根本原理について少し申上げて見たいと存じます。前にも申した通り、フレーベル氏は始終二つのものを對立せしめて說いて居るので、例へば人間的の方面を？神的の方面、內部的のものと外部的のものと、自然的のものと、精神的のものと云ふやうに始終論を立てゝ居ります。そして自然的な外部的な衝動的な所を、教育陶冶に因つて、よくしやうとするのが、フレーベル氏の考と見ることが出來るのであります。されば今日段々唱へられて居る所のベルグソン氏やオイケン氏の精神生活を重ずる所の思想に於ては衝動的生活と精神生活とを對立せしめて我々がよく精神的生活を以て衝動生活を統整することを努めるのが實に我々人格の修養であるとするのでありますから、一方は哲學に其根底をおきフレーベル氏のは宗教に其源を發して居る點に於て元より相違はあるが、その說き方に幾か似たやうな所もあるやうに思はれます。

今日この紀念すべき日に當りまして、フレーベル先生の教育思想に就いて所感の一端を申述べて聊か先生を偲びたいと思ひます。少しでも皆さんの御參考になるやうな事が御座いますなら、望外の事と爲します。御淸聽を深謝致します。

木かくれて名譽の家の幟かな　蕪村

家ふりて幟見せたる翠微かな　同

學齡前兒童の發達と教養（完）

文學士　入澤宗壽

五、個性化の時期（つゞき）

自己支配。この時期中、前時代の經驗の自己同化上、及び個性化上、多くを健全に放任してやらすといふことは大部分の兒童について恐らく最も必要のことであらう。他の人から何等かの支配を受けることと、同年齡の兒童と何かを共同してやることは望ましきことではあるが同時に一日の幾部分は他人の一定の支配から放れることが必要である。

兒童は種々の遊戯に對して機會と堪能とを有す可きではあるが、同時に特殊のやり方も强ひられ又は自分の幸福と他人の快樂に對して必要ある限りは他の方法をやる事を出來なくさす事も必要である。勿論大人の標準を以て兒童を强ふるは宜しくない。惡行を繰返すに不都合な狀態に兒童を置き、善良の習慣を續けるに都合よき條件を與へなければならぬ。併し兒童は或事に對しては他人から直接に支配を受けることが必要である。支配、命令の大部は單に暗示たる可きであるが、然も易々諾々たる服從が必要である。

此の幼稚園時代に於てフレーベルは自己活動を甚だうまく力說した。然しながら多くの幼稚園に於ては兒童の自己活動は意識的か又は無意識的に敎師に刺戟され支配される。これは或幼稚園に始めて這入つた女の兒が「私は先生がお仰つた事をしやうとは思つたが、する事は厭だつた」といつた言葉によく表はれて居る。勿論多くの場合に於て、兒童は單に敎師の影響で物事をせねばならぬとは

意識しないけれども、さういふ場合も屢々起るのである。

幼稚園は又家庭に於けると同じく團體中の共通意識の發生及び保存をうまく力説して居るが時には自我の個性化が發達の著大なる部分を占める時に共通方面を力説し過ぎる場合が屢々である。この時代は大人に存するやうな社會的感情を發達させるには早過ぎるから、せい〳〵家族間の共同意識を幼稚園の範圍に擴げる丈けのことでなければならぬ。その間に個性的意識は天性の傾向と收得の經驗とに應じ、又は他人の實例よりの時々の暗示により或は幾分積極的要求に應じて形成せらるべきである。社會的發達のより高き形式は意識的個性の發達した後乃至競爭、反對、共同を含む同年輩のものとの交際が長くつゞいた後に始めて來るものである。幼稚園に從事する人々が思ふ如くに兒童が團體に對するうぶな共通意識や信頼の念はこの時代では共同的感情又は行爲の醇正にして永久なる形のものにはならないのである。幼稚園の中では感得せられる美しい幼稚園の精神も、外には存在しない、たゞ一時的のエデンの園にすぎない。それが永續の形を取るのに他の個性と競爭をやつた後の時代のことである。

故に家庭の同情的共同意識を押し擴げて幼稚園に及ぼすは結構のことであるが、この時代に社會的發達の行路に急進しやうとするのは無用のことである。併し家庭で共同意識を欠いだ子供に幼稚園で社會的共同的精神を與へることは後に社會的宗教的理想を形成するに至つて役立つもので有効必要である。

此の時期に於ては兒童は健康なる限りは甚だ活動的のもので、自分自身又は他の兒童と共に事をやつて不知々々の間に練習となるので、その方が大人から支配されてするよりも有効のものである。大人の支配を受けて活動することが一見非常な利益のやうであつても、その支配がすんだ後も

兒童自身でその通りやる樣な事でない以上、そんな支配は後の時代に廻すべき事柄である。この時代に於ける兒童の仕事は大人の活動に助けになる事を學んだり、爲たりするのでは無くして、兒童の興味に從つて色々な經驗をしてその個性を發達させるに過ぎないのである。

眞理の區別及び發表。知性の方面に於ては、この意識的個性形成の時代は觀念及び眞理の標準を形造る時代である。事物の關係と理由とが兒童の注目を惹いて茲に色々な疑問を發するに至るのであるが、それも在來の如き「それは何か」といふ問でなくして、「何の役に立つか」「なぜそんな事をするか」「どうしてするか」等の問を發して物質界及び人間の行動の法則を學ぶに至る。かゝる疑問の答案は他人から聞く方が早く得られるけれども、それは表面的であつて、經驗なり模倣なりから得る方が確實で有効である。兒童に答へないで置くのはその精神的發達を後らするものであるが、また兒童自身で有効に見出されるやうなことまでも絶えず答へてやることは觀察を制限してよくない結果を惹起すものである。

此の時期は他人の影響が兒童の想像の上に最もよく働く時代で、兒童は他人のした事を獨り居るときにやつて見るものである。かく彼が他人のなす事を見て興味を感じた事をやつて見て自分の個性を擴げて行き、精神上の經驗を增して行くのである。

茲に兒童が想像したことと、實際經驗したことを明瞭に區別することは、知性の發達上重要のことで、かゝる力を得る仕方は中々驚くに足るものがある。それは實際ない事をして遊ぶといふ過程にあらはれるもので、こゝに兒童は實際のことと、想像上のこととの對照を感じて來るのである。

記憶。眞の記憶が可能となるのは、兒童が自由の觀念を獲得し又自分について確かりと意識的になつた後のことであつて、この種の記憶は四歲及

び五歳頃の兒童に著しい。彼等は前の時期に起る如き、出來事の記憶のみで無く、出來事に對する關係を考へて、其の出來事を現在の經驗と比較するばかりでなく、今の自己と前の自己を對照比較して關係をきめて來る。

この時期に於ては類似聯合が兒童の記憶に重大な位地を占めて來る。前の時代には記憶は言語や對象から喚び起されて來るが、今は他人か經驗を聞く時それに類似した經驗を喚び起すことに興味を感じるやうになる。

併し此の時期に於ては兒童は殆んど有意的記憶の力を有しない。彼の記憶は前の時代に行動が四圍から影響を受けるやうに全く外部の支配に從ふものである。彼は可成豐富な材料を記憶して居るけれども、自分で好むがまゝに經驗のある部を喚起すことは出來ないことが屢々である。

此の期に於ける兒童は嘗て見た事件を言葉で發表するものであるが、その話を秩序と時間とによつて整理することは出來ないものである。歌やお噺しを記憶することも出來るが、そのお噺の言葉を覺えないでは話しが出來ないのが普通である。

想像及び標準となる心像。想像的活動は既に前の時期に始まり、又次の時期にも著しいが、この時期にも甚だ著しく現はれるものである。自分でお話を拵へたり歌を出放題に作つたりするのは此の時期にあらはれて來る。

又此の時期に對象物から標準的の特長を捉へてそれで他の物にあてはめる作用も起つて來る。甘いとか酸つぱいとか、堅いとかといふ區別もかくして確定して來る。慣習的な標準、たとへば月とか、時間とか、金錢とかについても漸次覺えてくる。

兒童の多く特に前に芝居の遊びをしたり又それに興味を感じ或はお伽噺を面白がつた兒童はその影響がこの時期のみならず、次の時期にも殘つて働く。かゝるお噺が新しい精神上の經驗に機會を

與へ、又愉快なるものに對して精神を自由に活動させる機會を作るものである。

概念及び推理。兒童が知覺を反覆したり又は他人の經驗によつて得た心像から形成する標準觀念は、漸次に直接の感覺や全くの想像から離れて概念の形にすむものである。概念を形成する二つの主な要素は同じ種類の經驗を反覆することと興味を感じて經驗の或部に注意を集中することと、の二つである。反覆は習慣の形成に大なる働きをなす如く概念の構成にも大なる働をするものであるが、概念に於ては徑路が一層意識的で經驗の部分に注意が集中される。斯の如くにして意識的觀念が形成され、周圍から獨立するに至るのである。

可なり久しくの間は兒童の心像と概念とは殆んど區別のないものであるが、標準心像が形成せられるに及んで、この標準を考へることが起つて來る。兒童の多くは久しい間、想像的活動に止まつて居るが、或者は單に想像活動に滿足しないで、相互關係を吟味しやうとする。この種の兒童は常に質問を發し、その質問も遊戯上の性質のもので無く、世界の神秘を解決する大事業に關するやうな種類のものである。彼等の心は遊び半分の想像で滿たされないで、たえず理窟と、關係と、原因とを充されて居る。かくしてその自己の經驗と他人から聞く答とによつて概括をなすのである。

此の時期の推理は啻に活動的で鋭敏であるのみで無く、純粹の形式に於てあらはれる。尤も、概念の數が少ないのと確かでないために推理を誤り又兒童の想像する一般原理が不確實なために過を生ずるけれども、それから引き出して行く議論の行程には誤りがない事が多い。この時のそれらが彼の思考の世界に基礎となるものである。

次の時代に於ては、此の時期ほど宗教、哲學の根本問題に興味を有することは稀である。かくして事物の一般的圖式の或觀念を得てからは、むしろ特殊の問題に興味を有するに至り、青春期の變

化期に至るまでは宇宙の問題には眼を向けないものである。

三歳から六歳に到る期間は、殆ど前の時期が感情生活形成の時代であつた如く、知性の形成時代である。前の時期に經驗によつて生じた感情上の態度が永續的である如く、此の期に形成された一般觀念と同樣に永續的である。併し、この期に於ける兒童の一般觀念は一定、正確である必要もなく望ましくもないが、正しい方向に向つて出立するといふことは必要で亦望ましきことである。知覺的であるか、反省的であるか、集中的であるか分析的であるか、散漫であるか多方面であるかといふ如き精神の一般型式は可なり、この期に於て形成されるものである。他人の精神が、發達する兒童の精神を變化し、型造するけれども、この時期に於けるそれらの影響は恐らく、生得的傾向及び感情的經驗ほど大ではない。

此の時期に形成せられる最も重要なる概念の一は、數の概念である。始めには一、二、三等の言葉が意味なしに用ひられるが、後にはそれが色々の物に應用せられ、六つよりは十が多く、廿よりは十が少ないといふ樣な事を知り、事物を離れても數について考へるやうになる。これは四歳から六歳までに通常あらはれるものである。

如上、幼稚園時期の兒童について、カークパトリック氏の說く所を見た。自由主義、心理主義に捉はれて居るやうな所もあるが、大體に於て研究上の結果として尊敬せねばならぬ。カ氏の本には一々例證を擧げて居るが煩をさけてそれは凡て略した。所謂兒童の質問を以て宇宙の問題、宗敎、哲學の問題とした如きは、形式に捉はれて實質を忘れて居るかの感がある。たゞし或形の推理が彼等に行はるゝは實際で、或論者は推理の如きはずつと後でなければ發達しないといふけれども、その根本のものはこの時期の兒童に見る所である。「未だ發達しない」てふ消極的考察に捉はれないで

實際について見て來なければならぬ。特に思考の一般形式がこの期に定まるとすればこの時期の取扱は甚だ重要である。その他種々附言したい事があるが、あまり長くなるから茲に擱筆して、多くを賢明なる讀者諸君の判斷にのこして置く。

『トム・ソーヤー』(二)

岡田みつ

‖英文學に現はれたる子供(十七)‖

(正月號に掲載したのゝ續きと御承知願ひます)

トムは、ポリー伯母さんの所へやつて來た。伯母は寢間。茶の間、書齋兼用の奥まつた陽氣な一室の、開け放した窓近く、坐つて居た。そよ吹く夏の風、四邊の靜けさ、花の香、蜂の薄眠い囁きが、影響を及ぼして、伯母は、編物をしながらコツクリ〳〵居眠つて居た。猫の他に相手が無いのに、猫までが伯母の膝の上で交睫(まどろ)んで居た。伯母の眼鏡は大事をとつて、白髮頭の上に押し上げてあつた。伯母はトムが疾くに仕事を捨てゝ出奔した事と思ひきつて居たのに、かうやつて、不敵にも態々自分の方から、叱られにやつて來たのを不思議に思つた。トムは、

「もう遊びにいつても宜いだらう。伯母さん」

と言つた。

「何え。もう? どれ程爲たのだへ?」

「すつかり出來てしまつたの。」

「僞言(うそ)を御吐(つ)きでない—僞言(うそ)だけは止して御くれ」

「偽言ついてやしない。すつかり出來てしまつたの。」

ポリー伯母さんは一向信用しなかつた。で、自から檢査しに出掛けて行つた。トムの言ふ事の四半分でも、眞實だつたら、其で滿足したらうに、これはまた、塀全體に白ペンキが塗つてあるばかりか、仰々しく、二重にも三重にも塗つてあつて、御まけに地面まで白く一筋引いてあるので伯母の驚愕は、非常なものであつた。

「まあ〳〵。思ひ掛けもない。トムや、御前は氣が向けば働くのだね。」と賞めて置いて、次の句で其を落して言ふには「だが御前が氣が向く事は滅多にないのだ。まあ、いゝワ。行つて遊んで御出で。而してその內に家へ戻つて來ないと非道いよ。」

伯母は、トムの働きの美事なのに吃驚して、トムを戸棚へ連れていつて、上等の林檎を撰り取つて渡しながら、惡戲をしないで、眞に働いて得た褒美の有難味や、嬉し味を說いて聞かせた。而して伯母が例の通り、聖書の句を擔ぎ出して御說法に括りを付けてゐる中に、トムは、ドウナット（油で揚げた菓子）を一つ、こつそり釣り取つた。

トムは家を飛び出した。その途端にシッドが、二階の裏部室へ通るやうになつて居る戸外階段を、上りかけて居るのを見付けた。土塊は手近にあるので、トムは、之屈强と其を投げ付けたので、瞬く間に空中に泥が撒きちつて、殊にシッドの身邊には霰のやうに繁く降つた。あつけに取られたポリー伯母さんが、僅に事の譯を悟つて、救助に驅け付けた頃には、六七の土塊がシッドに當つて、トムは疾くに塀を乘り越して見えなくなつて居る。門もあるのだが、トムは大抵いつも大急ぎなので、門を出入りする暇はないのである。シッドが黑糸の事を言ひ出して自分に迷惑を掛けた怨は、之で「あいこ」になつた、とトムは心淸々しく覺えた。

トムは、町の一區劃を曲がつて、自宅の牛小屋

の裏へ續く、路の惡い細道へ出た。もう捕まつて小言を言はれる氣遣ひなしと安心して、廣場(スクエーア)へと急いで行くと、其處には小年軍が二隊、豫約通り、今や戰を始めやうとして居た。トムは、甲軍の大將で、ジョー・ハーパー(トムの親友)が乙軍の大將であつた。兩大將と、も自ら手を下して戰ふなども不思議な事をしないで、—其は年下の「へぼ」に相當な仕事だから—其處に坐を占めて、傳令使に命を傳へて軍の指揮をしてゐた。トムの軍は、長い激戰の末に大勝利を得た。それから死者の數を檢し、捕虜を交換し、次回の不和の條件を相談し、その結果としての一戰の日を取極めて兩軍ともに隊伍を作つて、靜々と陣地を引上げたので、トムも獨り家へ戻つた。

夕食の間、トムがはしやいでゐるので、ポリー伯母さんは此子は如何したのだらうと怪しがつてゐた。シットに泥を打付けたとて烈しく叱られても、一向に平氣でトムは、伯母の目の前にある砂糖をつまみ出さうとして、遂に伯母に手先を打(ぶ)たれた。

「伯母さんは、シットが砂糖を取つても、打(ぶ)たないんだナ」とトムはいつた。

「さうさ。シッドは、御前のやうにうるさく人を困らせないもの、御前は、私が見て居ないと、いつでも〳〵その砂糖壺に手を入れる。」

といつて、伯母は臺所へいつてしまつた。その留守に、シッドは叱られないといふ保證に安心して、砂糖壺に手を伸した。その樣子が之見よがしなので、トムは口惜しくて堪らなかつた。處がシッドの手が辷つて、壺は落ちて、破れてしまつた。トムの狂喜の體といつたら、言語も出さず默してゐる程であつた。「伯母さんが來ても、僕は一言もいはないで默つて居やう。伯母さんが誰が爲(し)たのだといふと、彼奴(あいつ)が返事をするだらう。而して彼奴が叱られる處を見るんだ。之程愉快な事があらうかと。」考へて居た。伯母が入つて來て、破れた

壺を眺めては、怒りの電光を眼鏡の上から發射してゐる間、トムはもう默つて居られぬ程に嬉しくて〳〵堪らず「それ始まるぞ」と獨語してゐると、トムに急に床に打仆されてしまつた。オヤ！と思ふ間に、伯母の手が再び打たんと振り上げられたので、トムは大聲に、

「御待ちよ。伯母さん。何だつて僕を打つの。シッドが破したンではないか！」

ポリー伯母さんは困惑して、手を止めた。トムは、伯母が氣の毒がるかと待つて居たが、伯母口をきいた時には「うむ！打たれても損では無からう！。私が知らぬ間に、どれ丈太い惡い事をして居るか知れないもの」と言つた切りであつた。

併し伯母は心が咎めて、トムに優しい言葉を掛けてやりたいとは思つたが、さうすれば自分の惡かつた事を自白するやうに、トムに取られて、却て訓練にならぬと考へた。それで止むを得ず默つてゐて、心を痛め〳〵用事をして居た。トムは拗ねて隅に引込んで、自分の禍を得意で居た。伯母が內心自分に對して詫をしてゐるのを承知してそれをよい氣味だと思つて居た。而して此方からは、素振にも心の中を見せず澄して居やうと定めて伯母が時々哀な涙ぐんだ目付をして自分を見るのを勘付いて居ながら、態と知らぬ振りをしてゐた。而してトムは自分が死にさうに病み煩つて居るところを想像して、伯母が首を差し寄せて、どうぞ一言宥すと言つてくれと歎き乞うても、自分は壁の方を向いて、その一言を口に出さずに死んでしまおう。其時は伯母はどんな氣持がするだらうと考へたり、又自分が溺死して髮が濡れて、心の苦がなくなつて、河から家へ連れて來られるとしたら如何だらう。伯母は、必然、死骸に取付いて涙を雨のやうに落して、神樣に此子を生き返らせてと祈つて、もう〳〵決して此子を詈罵しせぬと言ふだらう。それでも自分は冷たく青くなつて

死んでゐて、何の音もさせないでゐやう。とだんだん空想が事實らしくなつて來て、釣り込まれてトムは幾度の涙を呑み込んでは、僅かに咽び泣かずにゐた。目には涙が一杯溜つて、四邊が茫として來た。瞬きをすると、その涙が溢れて鼻の先からぽた〳〵落ちた。かうやつて悲みを育て養ふのが何よりの道樂になつて、もう俗世界の快樂が邪魔をしに入つて來るのが此上なく、厭はしく思はれた。自分のこの悲憂は世間並の愉快には接觸させられぬ程に、神聖なものとなつた。それ故從妹のメリーが、一週程田舍へ泊りにいつて、やつと戻つて來た嬉しさで、跳り込んで來た時に、トムは立ち上つて陰鬱に、愁を帶びた風で出て去つたそれと入れ違ひに、他の入口からメリーが、影と日光とを伴つて入つて來た。

＊　＊　＊　＊　＊

月曜の朝、トムな情ないと思つた。月曜の朝はいつもかうなので、また一週間學校で苦しむその苦の始まりだと思ふからなのである。トムは月曜日毎に「遊ぶ日が途中にはさまらなければ宜いに。却て束縛不自由の身の上に戻るのが辛い。」と必ず思つた。

今日も、トムは臥床の中で考へて居た。病氣であつて欲しいな。もうさうだと、學校を休んで家に居られる。や、之はものになりさうだ。と身體の檢査に取り掛つて見たが、何處にも惡い處がない。更に精査して見た。幾分腰が痛い氣味があるので、其方面に盡力して見たが、やがて痛みらしいものが薄らいで、遂に何ともなくなつてしまつた。再び熟と考へるうちに、こんだは良い事を發見した。上の前齒が一體グラ〳〵して居た。之は好運だと、手始めに唸りかけやうとして、不圖考へたのは、齒が痛いと申立てたらば、伯母はきつと其を拔いてしまふだらう。拔くと痛いから、齒痛は取つて置きにして、猶よく考へる事にした。暫くは、何も計が浮んで來なかつた。その内に

或醫者の話を思ひ起した。如何とかすると、二三週間も病み付いて、其果てに指を失ふやうな恐ろしい事になるといふのであつた。トムは、敷布の下から、痛い足の指を引出して檢査したが、其病の兆候を一向心得て居ないので困つた。併し試めして見る價値がありさうなので、勢よく唸り出した。

傍のシッドは何も知らずに眠つて居た。トムは、段々大聲に唸つた。而して、實際足の指が痛み出して來たやうに感じた。シッドからはやはり音沙汰なしである。トムは骨折りで息がせかせかして來たから一と休息して、又息を吸ひ溜めて、盛に上等の唸り聲を連發した。シッドはやはり鼾をかいて居た。トムは腹が立つて、シッド〳〵と呼んで搖り起した。それが功を奏したから、トムは改めて呻吟き出した。シッドは欠伸をして、其から身を起こして肱枕で、トムを熟と視て居た。トムは構はず唸つて居た。シッドが、

「トム、おい、トム！」といつても、返事もしないで居た。

「おい、トム！如何したの？トム。」とシッドはトムを搖ふッては、その顏を氣遣しさうに眺めた。トムは苦しい中から、

「いけない〳〵。さう搖かしては。」と言つた。

「如何したの？伯母さんを呼んで來るよ。」

「不用々々！もう直に直るよ。誰も呼んではいけない。」

「だつて呼んで來ないでは。そんな聲を御よしよ。恐い！何時からこんなの？」

「もう幾時間も。あ……さう動いちやいけない。死にさうだ。」

「トム！何故もつと早く僕を起さなかつたの。御止しよ。その唸り聲をきくと身が縮まる。一體如何したの？」

「御前の惡い事は皆勘辨してやるよ。(呻吟)何でも御前の僕にした事はね。僕が死んだら…」

「死ぬッて！まさか！御止しよ。もしも…」
「誰の惡い事も皆宥してやる。（呻吟）皆にさう傳へて御呉れ。あの僕の窓枠と片目の猫を、この頃村へ來たあの女の子にやつてね、而して…。」
シッドは衣服を急ぎ、纏うて出ていつてしまつた
トムは想像に誘ひ込まれて、眞害に苦しくなつて呻吟の聲なども木物になつて居た。シッドと階段を飛ぶやうに降りて、
「伯母さん！來て御くれ　トムが死にさうだ！」
「死にさうだッて」
「あゝ。愚圖々々しないで、直ぐ來て。直ぐ。」
「空事だ！そんな事をほんとにするものか。」
と言ひながら、伯母も二階へ飛んで來た。シッドとメリーもあとについて。伯母の顏は、白くなつて唇は震へて居た。トムの臥床の傍へ來て、息をはづませて
「トムや如何したの。」
「伯母さん、あの…」
「どうしたのさ。エ、如何したの。」
「あの痛い足の指がなやむの。」
老婆は椅子に身を落して、少し笑ひ、少し泣いて、次に同時に泣き笑つた。其で勢が付いて、
「なんと人を吃驚させるのさ。馬鹿聲をやめて御起き。」
吟呻の聲ははたと止むで足指の痛しどこへやら去つてしまた。トムも少してれて、
「あのね、指がなやんで痛かつたので齒の方はもつとも氣が付かなかつた。」といつた。
「齒だつて！齒がどうしたのさ。」
「一本グラ〳〵してゐて、非常に痛むの。」
「宜い〳〵。もうその聲は止して御呉れ。口を明いて御覽！成程ゆるんでゐる。だけれど死にはしないよ。メリーや絹糸を一筋と、臺所から火を一塊持つて來て御くれ。」
トムは急いで

「抜いちやいけない。伯母さん、もう痛くないよ。止して下さい。學校を休んで家に居たくはないから。」

「家に居たくない！なんだ、學校を休んで魚釣りにでも行かうと思つて、こんな騒ぎを初めたのかへ。ほんとに〳〵、私がいろ〳〵可愛いがつてやつても、御前は呆きれた眞似ばかりして私を困らせるのだね。

その内に齒を抜く道具が來た。老女は、絹糸の一端にわなを作つてトムの齒に引掛け、もう一方の端を臥床の柱に括り付けた。而して、火の塊を急に、トムの顏の前にツと差し寄せた。その拍子に、齒は抜げた。今でもその齒はベッドの柱にぶら〳〵下つてゐる。

凡ての苦腦はそれ〳〵埋合せのあるもので、朝飯後トムが學校へいつて見ると、前齒の抜けたところから、珍妙な唾の吐き方が出來るとて、皆に羨ましがられる身の上となつた。その演技を珍らしがつて、大勢生徒が着き纏つた。今まで、指を怪我をして皆に歎賞されて居た一少年は、其爲に崇拜者がなくなつて、名譽が地に落ちてしまつた。それで詰らなつて、「トム、ソーヤーのやうな唾の吐き方なんか、何でもない。」と心にもない輕蔑の語を漏したところが、「何だ酸い葡萄」（イソップ物語りにある手の屆かぬ葡萄をあげつて「酸い葡萄」と惡口をいつた狐の話かして出した語）と他人にいはれて悄氣返つて獨りぶら〳〵して居た。

古き世を紋に問はるゝ幟かな　太祇

藪村はこゝにと立つる幟かな　一茶

大風の俄かに起る幟かな　子規

幼稚園日記（三）

リリアン、ハーディ女史著
田中生抄譯

もう夏になりかけました、兒童達の荒れた土地はまだ花壇にはなりません。園藝作業に興味を持つてゐる或兒童が「それをするには私のお手傳ひが要るでせう」と言ひました、けれどもこの兒童はまだ五歳にしかならないのですからこの兒童一人位のお手傳ひは物の數にもなりません。

他人を賴つてばかりゐる愚かな人に小言一つ言はず古い家の土臺を花園に作り變へて行くには激しい勞働と時間と忍耐とを多分に要します、而かも私達は傍觀者から侮蔑的の言葉を浴びせ掛けられるのでありました。

兒童の父親の一人と二人の友達が大概毎日夕方と土曜日の午後とに働いて下さるし兒童の兄さん達も五六人手傳つて下さつたので大分物になりさうになりました。而して私達は慾が出て成丈善い花園を作り度いと思ひました、私達の花壇は復活祭の飾物に適する樣な花を作ることは出來ませんでしたが室内で鉢に育てられた水仙が兒童達のお金で買つた百合と共に敎會堂へ運ばれました。

兒童等が時折小錢を持つて來ますのでクリスマス以來聖壇に花と蠟燭とを供へて置くことが出來ました。

一九〇七年四月――幼稚園へ出で下さるには貴方は先づ階段の下の石炭房の入口とでも思はれるやうな狹い小さい戸からお入りなさるのです、し

かし室内は兒童達が其處に居合せたら非常に面白いところなのです。

それは敎會堂です、而して若し貴君が金曜日の夕べ敎會で使用してゐる時それを御覽になつたらそれは兎ても幼稚園用にはならないとお思ひなさるでせう、しかし月曜日の朝には大々的の作り變へを行ひます、私は聖壇の前の室にリバティー、カーテンを引かせます、すると總べての長椅子や椅子や拜跪筵(ケネリングマット)等が見えなくなつて了ひます、それから小さいテーブルや椅子が出て來ます、それから人形、搖籠、洗ひ洒した椀、鑵、カナリヤ、鳩植木、ブラシ、塵取り、掃塵具等が續々と並べられます。而して敎會堂はすつかり家庭的(ホームリー)になつて了ひます。其處には非常に古風な二つの爐と二つの厠の滓溜(ほりだの)があります。この敎會堂は昔は二軒の茅屋であつたのです、それから大きな疊戸もあります、私達は今それを使ひませんが後に役に立つだらうと思つて居ります。

窓は都合のわるい事に上の方に附いてゐるのです、而してお剩(まけ)に少し小さいのです。

壁は中途に綠色の區劃板があつてクリーム色に塗つてありますので却々綺麗です。兒童は赤いカラとカフスをつけて長袴(オーバーオールズ)を穿いて居ります、母親達は週末にこれを洗つてやります。

私は目下十二人の兒童があります。

牧師さんが兒童を選びます、牧師さんは十九年間もカノンゲートで其職を勤めて來たので土地の人々とは懇意でした、牧師さんは始めの内はいゝ家の子供ばかりを選びました、土地の人々は皆非常に窮乏してゐるのですが外觀を顧慮して子供達は大抵清潔にしてありました。

私は毎日手と顏とを檢査しました、そして若し一定の標準に達してゐない時は洗ひ直させました この標準といふのは漸次高くなつて行きます、それですから私の許に最も長くゐた兒童が最も清潔(きれい)になつてゐるのです。

私は學校へ來て顔を洗はせられるのは不名譽事であると兒童に思ひ込ませやうと努めました。そして阿母さんにこれでは學校へ行つて洗ひ直させられるか何うか聞いてごらんなさいと話します。

私が休暇を得て他出する少し前の事でした。敎育に趣味を持つてゐる市の園丁が私達の花園に力を盡してくれやうといつてくれました。

園丁は賃銀なしで數名の人をよこして私達が地均らしをして置いた所へ赤い灰を敷き砂を入れ善い土壤を入れ草花の種子を撒いてくれやうとしました。私は花園から々な物を取り除いて今にそこが甚麽になるだらうと非常に大きな期待の眼を睜つて居りました。

園丁の子供は手紙で先生はそれにお關ひなさらぬやうにと言つてよこしました。

私は九時半から十二時半までしか授業をしませんでした、そして時としは午後になつて一人二人兒童を呼んでみることもありました。

併し私達の庭園が出來上つたら、お天氣のいゝ時には午前も午後も同じやうに私は兒童を皆呼ぶつもりです、そして園藝の作業を行つたり自由に遊び廻つたりしませう、何時でも事情が許せば戸外に出てゐることにしませう。

スノードロップや香紅花や櫻草や延命菊は最早花を咲かせました、そして兒童達は自分達の花に對して非常に强い興味を繫ぐやうになりました。

土ほぢりは大層嬉ばれます、兒童達はまア甚麽によろこんでゴミ（兒童達が土のことを斯ういふのです）を堀ることでせう。

吩咐けられた通りに兒童等は多量の土壤を掘り返したり篩にかけたりします、そしてそれを花壇へ運びます。

兒童達の內四人は四歲と五歲との間でした、その他の兒童はたつた三歲です、兒童達は本當に小さく見えるのです、そして兒童達の閱歷の限界は驚く程狹いのであります。

私はある素張らしい計畫を夢想して居ります、私の友人が貧乏人の爲めに休日なぞに遊びに來るやうな家を田舍に經營して居りました、私は私の兒童を皆でなければいくらかでも一週間ばかり其處へつれて行きたいと思ふのです、それは大仕事です、併し兒童達は甚麽に嬉ぶでせう。

私はこれで助手を得ることが出來ませんでしたが次の期から助手を一人得られさうな望みがあります、牧師さんは幼稚園を小學校にしやうとする下心があり、兒童達を十歳若しくはそれ以上になるまでも止めて置きたいのです。爾なつたら甚麽にいゝでせう、私は何うあつても兒童達を就學年齡の七歳まで止めて置くことに盡力いたしませう

三歳から五歳までの二年間は兒童は甚だ小さくあります、而して兒童達の生活して行く境遇には甚だ畏敬すべきものがあります。

一九〇七年五月二日——私達は一週間ばかりお休みにして居りました。兒童は今では總體で十四人になりました、近頃では少し混雜して不秩序になつたやうです——早くもう少し都合のよくなることが望ましうございます。私は一日なぞは口を利く暇もありませんでした、而して二日といふものはホンの少ししか口を利くことが出來ませんでした。斯る事情の下にある人は誰でも助手が欲しいと思ふでせう。私は本當に手がもう二本餘計にあるといゝなぞと思ひました。「ピンがチク〳〵刺して痛い」だの「私のレースを結んで頂戴」だのといふのが度々又それも都合のわるい時に起る訴であります。

私達の庭園は本當にいゝ所です、縱が九十呎横が二十呎ばかりもありませう、其處には午前と午後とに使ふ二つの運動場と芝地と多くの花畑と愉快な大きな砂床とがあります、いけないことには砂があまり深くないのです、そして底はいつも乾いてゐなければいけないのに何うも水が溜つて

ゐます、併し私達は唯それを持つてゐるといふだけでも大いに感謝せねばなりません。

水仙やニホヒアラセイトウや延命菊や九輪櫻は花が咲きました、兒童達は非常にうれしがつてゐます、目下のところでは些か嬉びすぎてゐるやうですが直き原の通りになるでせう。

這麼ことを言つても人樣が本當にして下さるでせうか、兒童達は草といふのは何であるか知らないのです、私は最初兒童が彩色繪の草を見て何が描いてあるか分らないといふことを知つて驚きました、それから私が私達の庭園に草を植ゑませうと兒童に話した時兒童達は私が硝子の話をしてゐるのだと思ひました。

兒童達は芝生を何と名づけるものだか知りません、私は兒童達に草がすつかり根付いて了ふまで草の上を歩いてはいけませんと申附けました、而してお互に草の方を指さして「あの上を歩くのぢやないの」と言はせ合ふやうにしました。

キング公園は兒童達の家からは歩いて十分も掛らぬ所にあります、ある兒童はもつと近くに住んで居ります。

兒童達の進歩發達して行く樣を睜つてゐるのは非常に面白いものであります、ある者は急速に變化します。

二三月前のことです、或日氣の重い鈍い男の子が言ひました、

「ハーディさん、僕の阿母さんは女です」

「さうですよ」

「それからヘンドリー叔父さんは男です」

「さうです、それぢやあなたの阿父さんは？」

「僕の阿父さんは阿父さんです」

「それぢや私は何ですか」

「あなたはハーディさんです」

這麼會話がありましたがもうこれ以上この男の子を啓發することは不可能であるやうに思へました。過日この男の子は庭園で釘を拾ひました、その

釘はハーディさんに上げるのよと他の者に言はれるとこの男の子は
「否、釘といふものは女の持つもんぢやない、釘は阿父さんに上げるものだ」
と言ひました、そしてこの男の子は阿父さんの許へその釘を持つて行きました。

保育入門（四）

四、幼稚園教育の原則

倉橋惣三

幼稚園の教育は一般教育の原則に從ふべきは勿論であるが、特に幼稚園教育の特質として、缺くべからず又超脱すべからざる四つの原則がある。それは卽ち

（一）、自發的なるべし
（二）、相互的なるべし
（三）、具體的なるべし
（四）、習慣的なるべし

といふことである。

（一）、自發的

幼稚園教育が自發的なるべしといふには、更に細かく分ければ次の如き諸種の意味が含まれて居る

（い）、先づ第一に、幼稚園に於ける幼兒の生活は、他から强ゐらるゝものでなくして幼兒みづからの心から發するものでなければならない。何一つするにしても、いや〳〵ながら餘義なくするとか、乃至いや〳〵といふ程でなくとも、他から促されるから機械的に動くといふ樣のことであつてはならない。どこまでも內から動いて來るのでなくてはならない。――ならないといふよりは、幼

兒の生活は當然そうある筈のものである。世に潑剌として抑え難き自發性に富むもの、健康なる幼兒の如きはない。而してその自發性は單に强いばかりでなく廣いものである。換言すれば極めて多方面に亘つて動いて居るものである。幼兒敎育者は先づ充分に之れを發見しなければならない。而して、之れに正當なる滿足を與へなければならない。之れが充分に出來るならば別に他の何物をも敢て外から加へなくともよいと言つてもよい位である。尙ほ一歩進んで言ふならば、幼兒敎育者は外から何物を幼兒に與へんと苦心するよりは、此の內よりの自發性を聊かたりとも禁抑することはないかと注意すべきなのである。

（ろ）、しかし、幼兒は其の『內に豐なる自發性』を自ら存分に外に發輝し得ないことのあるものである。謂はゞ有り餘る自分の力を如何に用ゆべきかを自ら知らざる狀態にあることのあるものである。是に於て幼兒敎育者は之れを誘導してやらなければならない。幼兒は豐なる自發性を有するが故に、たゞ打ちすてゝ自然に任せて置けばよいといふものではない。引き出してやらなければならない。促してやらなければならない。導いてやらなければならない。誘つてやらなければならない。そうしなければ、折角の幼兒の自發性は其の一部しか發輝せらずに終ることがある。或は不正當な誤つた發輝をすることがある。甚だ惜しいことゝ言はなければならない。實に幼稚園敎育に於ける苦心の大半は、此の自發性の誘導にありと言つても過言でない。

但し、玆に大に考慮すべき點は、其の誘導の手加減である。誘導は必要である併し誘導が過ぐれば自發性の自發性たる特質が失はれて仕舞ふ。すなはち他動的のものになつて仕舞ふ。さうなれば誘導は幼稚園敎育上最も有害なるものになる。幼兒の自發生活を完からしむるためには誘導の必要がある。しかも誘導が過ぐれば幼兒を他動生活に

陷らしめる。之が實に幼兒教育の六かしさである。――幼稚園に於て、此の誘導が全然與へられない時に、それを極端なる放任といふ。此の誘導が過ぎて幼兒の生活を他動的ならしめた時に、それを極端なる干渉といふ。その間の適宜を得た時に、それを初めて幼兒教育といふ。

（は）、幼兒が自發的に何かをして居るといふことを、他の言葉を以ていへば、幼兒が其の事に直接の興味を感じて居ることである。更に詳しくいへば、其の事が面白くて其の事をして居るのである。即ち他に目的があつて、それのためにして居る樣な場合の反對である。ヘルバルトの所謂『直接興味』の狀態にあるのである。

一例を以ていへば、幼兒が後の處罰の恐ろしさ故に、いや〳〵ながら何事かをするとすれば、此の場合明かに非自發的である。他から餘儀なくさせられて居るからである。しからば、幼兒が後の賞與の得たさ故に何事をかするとすればどうであらう。此の場合は前の場合と異つて、幼兒は恐らく喜び勇んでするかもしれない。しかし、如何に喜び勇んで居るにしても、それは後の賞與に對する興味であつて、當面の仕事に對する興味ではない。さすれば之れ亦た眞の自發的とは言へない。所謂『間接興味』の狀態にあるからである。

但之れ亦幼兒の生活が有する一つの特色であつて、事毎に將來を慮り結果を考へる成人の生活に比して、幼兒は常に現在に生き、現在を樂んで居るものである。して見れば、後に來るべき結果の豫想を以て幼兒の興味を促すとこいふことが元來不自然なのである。吾人は前に（第二、『幼兒の教育』）幼兒に課業の意識の要求し難いことを說いたもの此の意味に他ならない。ヘルバルトは課業の意識のある教育に向つても『直接興味』を要求したのである。課業の意識のない幼兒教育が如何なる場合に於ても幼兒の『直接興味』を主としなければならないことは必然である。而して『直接興味』は

自發的ならずしては得られない。

（二）、相互的

之れにも亦いくつかの大切な意味の含まれて居ることを考へることが出來る。

（い）、幼稚園の教育が自發的でなければならないといふのは、幼兒一人々々に就いて考へたことである。すなはち詳しくいへば、幼稚園の生活に於て幼兒は各自が自發的でなければならないといふことである。しかも、幼稚園の生活は幼兒が一人で居るのではない。自分と同じ樣な多數の幼兒が集つて居るのである。卽ち幼兒の個人生活に對して第一の原則が必要であり、幼兒の集團生活に對して此の第二の原則が必要であるのである。

多くの場合に於て、教育は個別教育が最も効果が多い。殊に物を教授することが主になる場合に於ては、其の周到適切なることに於て個別教授に若くはない。それを普通の學校教育に於て學級編制のもとに集團教育を施すのは、一人の教師が同時に多數を教へ得るといふ勞力、時間、乃至費用などの上の經濟からである。學生の爲めには、出來るとならば個人教育が一番望ましいのである。ところで、幼稚園教育が多數の幼兒を組々に集めて教育するのも、之れと同じく經濟上の餘儀なさから出て居ることであらうか。出來ることならば一人の保姆が一人の幼兒を受持つて教育する方がよいのを、已むを得ずして集團教育をして居るのであらうか。否々、大に左樣では無いのである。

幼稚園教育が集團的に行はるゝことは、幼稚園教育の主要なる一必要である。前に述べた通り（第一、『幼兒の生活』）幼兒の生活は共同生活の强い欲求を有して居るものである。幼兒の教育はこれに適當の滿足を與へなければならない。のみならず、此の自然の欲求を利用することが最も自然にして、最も賢い教育の方法なのである。而して、此の集團生活にあつて、幼兒をして相互に相互を教育せしめるのである。

（ろ）、幼稚園教育は幼兒をして相互に相互を教育せしめるのであるとすれば、普通の教育に於ける教師と幼稚園に於ける保姆の位置とは趣を異にしたものになる。普通の教育に於ては、其の中心となるものは教師である。教師を中心として多數の學生が集團して居るのである。尙ほ一歩進めていへば、學生相互の關係よりも、學生各自と教師との關係の方が主なのである。併し、幼稚園教育に於ては之れと違ふ。卽ち幼兒相互の關係の方が幼兒各自と保姆との關係よりも主なのである。もとより幼兒各自と保姆との關係も貴重なる意義を有するものである。しかも、幼稚園に於ては、保姆が直接に幼兒各自を教育するといふよりは、つとめて幼兒相互をし相互に教育せしめる方が主要なのである。之れを教師中心の教育に對して、相互中心の教育といふ。

而して、眞によく相互中心の教育を行はれしめんがためには、保姆は其の活動に就て、たゞ努力熱心なるといふのみならず、深く工夫する處がなくてはならない。假令ば餘りに自己の活動を顯著なるに過ぎしめて、幼兒の相互中心を破る如きことがあつてはならない。自己を餘りに强い磁石となして、小さき鐵片の一つ〳〵をその群から引はなして、堅く自己の周邊に引きつけなければ已まないといふ風の態があつてもならない。

（は）、それならば保姆の役目は何をするか。何にもしないがよいといふのであるか。素よりさうではない。役目は相互中心生活の誘導である。

幼兒は共同生活の欲求を發するの時機にある。しかし、其の發達は、未だ此の、內に動く自己の自然の欲求を如何にしてよく實現せんかを知らない程度のものであることがある。殊に或る種類の幼兒に於ては、此の自然性の發達に缺けて居ることがある。彼の自分よりは年長なる成人にのみ親むことを知つて、同年齡者の交りを欲しない幼兒がある。學問的にいへば、社交性上の依從感情の

み多くして相互感情の少ない幼兒がある。斯ういふ場合、保姆の任務は大に大切になつて來る。その幼兒に常に自分の手を握らせて、之れを己れに親ませ樂ますことは容易なることである。その自分にのみ附きまとふ幼兒を其のともだちの間へ交はり入らしめて、幼兒相互の生活を樂ませるまでに、保姆はどんなにか大いなる苦心苦慮を要するであらう。

斯くて幼稚園に於ける保姆の位置は、幼兒等の傍にあつて、其の相互生活を誘導するか、或は幼兒等の中に交つて、其相互生活を誘導するのでなくてはならない。いづれにしても、自分が兒等の中心になるのではない。

(三)、具體的

第一と第二の原則は、いはゞ幼稚園教育の形式に屬する原則である。之れに對して第三、第四の原則は、幼稚園教育の實質に關する原則であると言ふことが出來る。

(い)具體的といふことの第一の意味は、幼兒生活の全體をその教育の、いつでもの對象するといふことである。換言すれば、知育とか德育とか、乃至精神の教育とか身體の教育とか、全生活から或る一面を抽象して對象とするのでなくして、全生活が常にそのまゝに、卽ち具體的に、教育の對象とせらるゝのである。(第二『幼兒の教育』參照)。蓋し、何の教育、何の方面の教育といふ類のことは言葉としては判然たる意味をなす樣であるが、實際に於ては、斯ういふ區別をする方が却つて無理である。生きた人間の教育は身體にせよ、精神にせよ、さう部分的に出來得るものではない。しかし教育の程度が上になるに從つて、多少斯ういふことが必要にもなる。少くも教育の目あてを、特に或る部分へ向けて考察した方が其の方面の効果を充分ならしむるに便なることがある。しかも、幼稚園教育に於ては、實際上にも理論上にも、斯かることはあつてならないのである。又幼兒の生

活の特色として、斯かることがあり得ないのである。

（ろ）具體的といふことの第二の意味は、幼稚園教育の教材（假りに普通教育の用語を借る）が、心理學上の所謂具體經驗を主にして、なるべく抽象經驗を用ゐないことである。心理學上の抽象經驗といふのは、卽ち概念の生活である。個々の人を意味せずして、『人といふもの』を意味し、個々の實行を離れて、『道德』をいふ如き類が之れである。しかるに、幼兒は未だ斯くの如き概念生活を明瞭になし得るまでに發達して居ない。のみならず、具體の生活に於て、大に多くの經驗を重ぬべき必要にあるものである。『植物』に就て教ふるのでなくて、實地の花を直觀させるのである。『道德』に就て說明するのでなくて、實行を示し又行はしめるのである。

（は）、尙ほ他の方面からいへば、幼稚園の教育をなるべく幼兒の實際生活に近づかしめ、その實際生活に於て充分の教育的効果を得ることの必要がある。勿論幼稚園は其の設備に於て、その規律に於て、幼兒の實際生活（家庭に於ける）と全然同一なることは出來ない。如何に無頓着なる幼兒と雖も、我が家と幼稚園との別は感知せざるを得ない。殊に我國にあつては、幼稚園の構造は見るからに普通の住家と異なり、『先生』の服裝は家庭の人の服裝と異なる。幼兒は幼稚園の門を入ると共に多少あらたまつた感じを得ない譯にはゆかないのである。しかし幼兒の幼稚園に於ける生活を家庭に於ける生活と餘りに遠く隔たらしめ、幼兒をして二重の生活をなさしむるに至る如きは、幼稚園教育の本義に反すること甚しいのである。況や、家庭に於ける生活とは全然一種類を異にする生活をなさしむるに非ざれば教育を行い得ないといふことは決してないのである。

但し斯くいへばとて、幼稚園をして常に家庭に接近せしめよとのみ言ふのではない。家庭をして

幼稚園に接近せしむるの必要も亦、大に存するのである。たゞ孰れにもせよ、幼兒をして幼稚園なるが故にことさらなる生活を營ましむる（意識的に又無意識的に）が如きことなからしめるを要するのである。

（四）、習慣的

幼稚園教育に習慣の必要なることは誰れも知ることである。併し、習慣にもいろ〳〵の種類がある。それを分けて考へなければならない。

（い）、習慣の第一は動作上の習慣である。假へば正しき歩き方の習慣、上品なる擧動の習慣といふ如き、之れも確に幼兒期に於て與へ置く方がよい習慣である。しかしながら、幼稚園教育が習慣的なるべしといふは、斯かる簡單な意味のみではない。

（ろ）、次に、或は清潔の習慣であるとか、間食をしない習慣であるとか、單に動作の習慣よりは多少進んだものがある。而して斯くの如きも幼稚期から養つて置くがよい習慣である。

（は）、吾人は幼稚園に於て右の二つの意味に於ける所謂良習慣を與ふることに就て、勿論反對するものでなく、益々之れを奬勵したいものである。しかし、吾人は此の外に、もう一層內部的にして人格的なる習慣教育の必要なることを主張したいのである。之れを情緒的習慣といひ、之れによつて養はれたるものを情緒的基調といふ。

すなはち二年なり三年なりの幼稚園生活の間にいつともなく或る情緒的傾向が養はれて、それがその人格の一生の情緒的基調となり、理を離れ、努力を待たずして、その生活に根の深い基調を與へる。斯ういふことを得たいのである。而していつともなしに出來るといふは、要するに長い長い間の習慣に他ならない。たゞ一場の訓話、ただ一度の教戒などによつて、所謂理解的に或る感化を與へらるゝといふが如きことは、幼兒に於て未だ存しないことである。何の心もなく歌い、

慣れた唱歌。見るともなしに見慣れた額の畫。彼の時此の折といはず、空氣の如く絶え間もなく與へられた先生の愛。其の他何、其の他何と、斯うして一日々々と同じ情緒を繰りかへしてゆけば、人も識らず、我れも識らず、或る情緒は人格の根底に養はれざるを得ない。

幼稚園の教育が何よりも必ず與へなければならないものは、卽ち此の習慣である。他の知識、他の動作的習慣、かゝるものは或は必ずしも幼稚園於て與へずとも後に與へ得る場合があるかも知れない。たゞ此の情緒的基調だけは、幼稚園時期に於てこそ最も純に最も深く、これを養へることが出來ることが出來るものである。而して、理知見解の力の生じた後の生活に於て、到底之れ程純に且つ深く養ふことの出來ないものである。

幼稚園教育者は幼兒の理性及び記憶に訴へて、之れ之れと、目につく程の知識技能を得るものではない。否、そんな目に見え、分量につもり得る底の教育しか與へ得ない樣なものではない。知識は性格の寧ろ上層にあるものである。それよりも深く性格の底をなす情緒的基調こそ、幼稚園教育者の與へんとするものである。而して之れは一朝一夕の業ではない。長い、たゆまざる、周到なる注意によつて幼稚に其の習慣をつくらしめるのでなくては得られない。

* * * *

以上四つの原則として數へて來たことは、必ずしも幼稚園教育のみに適用せらるゝものではない。廣く一般の教育にも通じて誤りなきことである。殊に現代の教育の種々なる新らしい唱導は、或は被教育者の自發性の尊重に於て、或は兒童の共同的相互生活によつて得らるべき陶冶訓練上の價値の認識に就て、或は教育と實際生活との近接及び品性陶冶の教育に於ける情調的要素の必要に於て、いづれも著しき注意を促し研究を進めて居る狀態である。しかも、幼稚園教育に於ては、其の本質上、殊に之を以て必須なる原則となすのである。

雜錄

○フレーベル紀念會

四月二十一日はフレーベルの誕生の紀念日に當ります。當日午後三時から、東京女子高等師範學校附屬幼稚園で其の紀念會を開きました。來會の諸君堂に溢れ頗る盛會でありました。折り柄諒闇中のことにもあり、別に特別の趣向も致しませんでしたが、特に東京高等師範校教授乙竹岩造氏に請ふて、フレーベルの教育意見と現代の教育思想との關係に就て最も有益なるお話を願ひ、靜かに充分にフレーベルを紀念することが出來ました。乙竹教授の講演は本號に掲げてあります通り、フレーベルの教授意見を分析解釋して其の中から幾多の永久に新らしい教育上の眞理を闡明せられ極めて興味深いものでありました。近來、曰く誰、曰く何主義と、所謂新說新思想は、日を趁ふて吾々の研究を促し進めて參ります。しかし、フレーベルの如き教育上の大天才は、其の思想の根底に於て、いつまで經ても、所謂舊くなつて仕舞はない多くの眞理を有するものであります。否寧ろ或る意味では、新らしい立場から研究すればする程、其の古い說の中に更に深い眞理を發見し得るものであります。吾々は曰く誰、曰く何主義の新らしい研究を廣くすることを怠らないと共に、我フレーベルの研究を更に更に深くしてゆき度いと思ひます。

○上野陽一氏著『心學要領』

本讀者諸君から、教育の參考として讀むべき心理學書に就て御問合はせを受けることが屢々ありますが、先般上野文學士によつて著されました『心理學要領』は、そういふ方に最も適當なものと思ひます。書名の示す通り、要領を與へたもので詳細なる大著ではありませんが、その簡單にして要を得て居る處が殊に平常餘り心理學などを讀まれたことのない方々に至極くよいのであります。本誌上にも一般心理學の問題に就き時々掲載し度いのですが餘白がないので出來ません。熱心なる諸君は是非此の書を基として研究せられんことをお勸めします。（東京銀座大日本圖書株式會社發行　定價五拾參錢）

○『子供の友』

婦人の友社から其の永い計畫の結果　愈々前月から『子供の友』と題する兒童用の雜誌が發刊せられました。主として幼稚園期から小學校の幼年級にかけての子供の爲のものであります。一體此の年齡の子供のための雜誌編輯の如何に六かしいものであるかといふことは、少しく教育的の立場を以て考へるものゝ皆感ずることであります。其の材料の撰擇、繪のかき方其他一寸した小さい點にまで、成人用の雜誌に比して何十倍か編輯上の苦心を要するのであります。餘りかた苦しくてはいけない。しかし亦おどけ過ぎて下品になつては尙困る。面白くなくてはいけない。しかし亦、面白いばかりでも足りない。之等の點に就て此の『子供の友』は中々細かく意が用ゐてあります。保姆諸君のために、いゝ保育の資料となると共に、また研究の資料にもなると思ひます。（東京雜司ヶ谷婦人の友社毎月一回一日發行、定價金拾錢郵稅一錢）

フレーベル自傳（第五回）

《マイニンゲン太公に宛てたる書翰》

倉橋惣三譯

三十、エナの生活

此時代のことで記してみたいことをもう一つ私は持つて居ります。それまでの私の生活は私が練習生をしてゐた時分、自然科學の研究を奬勵し種々の難點を私のために說き去つてくれた田舍醫者から受けた評價の他には一度も同情ある眼を以つて見られたことはありませんでした。けれどもエナでは敎育を施す手段として斯る同情は自由に得られるのでありました。エナには當時二つの學會がありました、一つは植物學會、一つは鑛物學會と呼ばれて居りました。

博物學に淸新な興味を持ち、具體的に働いてゐる多くの若い學生は會長から會員になるやうにと勸められました。而してこの奬勵的の愉快が私にも提供されました。

當時私は數種の學會に會員となり得る資格を持つて居りました。

綜合し又分類する私の天禀は博物學會に於てならいくらかの功業をなし得るかも知れないといふことをいひ得るのでした。而してこの學會は實際に私の入會を希望したのです。

この學會は設立者の死去と共に解散せられ、而して私は其後會員と交誼を結んで來ませんので、この學會へ入會したといふことは私の後生涯に何

等大なる影響を與へませんでしたが、而かも尙今や私の心内に力强く現れて來た高級な科學智識に對する憧憬を目覺めさせました。

大學内に住つてゐる間、私は極めて控目な經濟的な生活をして居りました。私の不完全な敎育と嗜好と憧憬は恰度この生活にふさはしいものでありました。私は晴れの場所なぞへは滅多に出たことはありません。而して斯る控目な生活をしてゐましたので兄(トラウゴット)を唯一の友として居りました。兄は私がエナに住居するやうになつての最初の一年間醫學を研究して居りました。

その時分でも尙非常に好きであつた芝居へは折々行つてみました。この始めての學生生活の第二年目に於て靜平な生活を送つて來たにも係らず私は困難な地位に陷りました。それは完く私が大學に入學する時から始まつてゐたのです、けれども三年半目に至る迄は現れて來なかつたのでした。

私が大學に行つた時父はたゞ第一半年だけの分としてゞはなく多分全學年のとしてゞせう私の生活費に宛た少額の銀行爲替を與へてくれました。

以前一寸申したやうに第一年の間私と共にエナにゐた兄が當時窮乏してゐましたので、私にまだ皆受取つてゐなかつた手當のいくらかを貸してくれと言ひました。兄は直き返金出來るつもりでゐたのでした。私は心よく多からぬ爲替の大部分を兄に與へて了ひました。けれども不幸にして私は金を返して貰へませんでした。而してそれが爲めに私は益々困難に陷りました。

私の地位は恐しく逼迫して來ました。私の多からぬ手當は第一年の終りまでにはなくなつて了ひました。けれども私は大學を離れることは出來ませんでした。殊に科學智識に對する憧憬が私を捉へて居りましたし。勉强して大事をなさうと思ひ立つた私がどうして大學から離れることが出來ませう。

且又私は父がもう半年私を大學に止めてくれるやうに說き伏せられ得るであらうと思ひました。父はこの事に就いて何も聞き屆けてくれませんでした。して私の保管人は父の所說に同意しませんでした、そこで兩者の强情の罰金は私が拂はせられることになりました。

第三半年の終頃には私の窮乏逼迫はいよ〳〵烈しくなつて來ました。私は食料屋へ何でも三十ターラーだかの借金が出來ました。

食料屋の主人が數回大學の統理部で私を呼び出して支拂を請求しても、私がすこしも拂ふことが出來なかつたのと、それから食料屋の主人が父の許へ言つてやつてもそんなことは知らぬと嚴しい拒絕に會ふばかりだつたので私は支拂をその上ぐず〳〵してゐる場合には禁錮せられると脅かされました。而して私は到頭この刑罰に從はさせられました。

私の繼母は父の不快を焚き付けました。而して父の頑固をよろこびました。

私の財產のいくらかを尙支拂ふことの出來た保管人は私を救うてくれられるのでした。併し彼は助けてはくれませんでした。何故ならば掟の文書は保管人の方から出した交涉を容れなかつからであります。

誰でも私の不幸續きを知つて父のかたくなの解けることを望みました。

私は代贖羊のやうにかたくな、兩親のむら氣に事へました。而して九週間といふもの代贖羊の如くエナ大學の牢獄に打ち萎れて居りました。(譯者註、獨逸の諸大學には手に餘る學生を懲らし最後の手段として禁錮すべき牢獄の設備あり、こは勿論都市等に設けらるゝ牢獄とは何等の關係あることなし)

遂に父は私が相續財產の名義になつてゐる父の財產に對するすべての要求を正式に棄て去ること

によつて私のために大學の賄方に金を送つてくれることに同意しました。而してそれ故に私は遂に自由を得ました。

囚はれ人として私の地位が私を鬱憂に投げ込んだにも係らず、私の囚はれの時間は全然無益のものではありませんでした。

科學的智識に對する入獄前までの私の努力は羅甸語の智識の確固たる基礎の缺乏を自覺させました、それ故私は今や友達の助けを得て出來るかぎり私の缺點を補はふと試みました。

初等文法の教ゆる應用の利かない斷片的な教示に從つて研究の歩武を進めて行くことは非常に難事でありました。言語の單なる外的の獲得といふことは智識に對する眞の內在的願望を僅の少しか進ましめ得ないやうに私には何時も思はれました、その智識といふのは私が心から深く望んで居つたものであります、又私が自由に選擇した結果なのであります。

けれども言語の智識が判然たる外的印象に結び付けられてゐる所では私は何時も事實と言語との關係を認めることが出來ました。例へば植物學の學術名稱の如きは私は直きに熟知するに至りました。心のこの特性は氣付かれずにそのまゝ過ぎて來ました。私は極く少しを知り而して了解しました。私自身に就て又私の日常生活の行爲に關しては何も得る所がありませんでした。

この牢獄時代の第二の仕事は幾何學の課題に對する準備でありました。この幾何學は私はある職業に於て直ちに獨自の地位を贏ちうるといふことを主張して居りました。

第三に私はウイルケルマンの「美術論」を研究しました。この美術論を通して或る高級な藝術情操の幼芽が私の心內に目覺めたかも知れません、何故ならば私は大なる興味を以つて同書の中に挿入してあつた版畫を審査しました。

私は是等の版畫の起した興味の燃燒を充分に認

めることが出來ました。けれども當時は私はこの影響は受けませんでした。而して美術に對する感情が私の心内に開展するのも遲いのでありました。

私が今以前のことや又その後のこと、偉大なもの又微小なもの、私を感化した美術的情緒を眺め返す時、而して藝術的情緒の源泉及び方向を認めた時私は藝術(彫刻並びに音樂)は言語學と同じであるといふことを悟りました——私は美術の概略を完全に學ばうとしましたが成功しませんでした而かも私は自分も亦美術的の教育を受けたならば美術界に於て何物にかなり得たであらうとはつきり感じました。

尙又私の禁錮せられてゐる間にゼンダヴエスク(ゾロアストラ教經文集)の撮要の惡い譯本が私の手に入りました。

(この古代波斯の經典の内に)我々のと同じやうな生の眞理の含まれてゐること及び而かも我々のとは完くかけ離れた宗教的立脚地を以つてそれが對比せられてゐるといふことの發見は私の注意を促しました、而して私の生活と思想とにある普遍性の感情を與へました。この感情は然しながら現れるが早いか消えてなくなつてしまいました。

三十三、父の家に歸る

一八〇一年の夏期の學期の初頃、私は遂に拘留の身から自由になることが出來ました。私は直ちにエナを去りました、而して私の大學生活も同時に終りを告げました。私は父の家へ歸つて行きました。

私は丁度十九歳でありました。その時私は屹度浮かぬ心と曇つた心と押付けられたやうな心とを抱きながら兩親の家へ歸つて行つたことでありましたらう。

けれども春がすべての自然を再び溫め目覺ませてくれました、而して眠つてゐた私の欲求をも蘇らせ更によきものに向つて進ましめてくれました。

私はこれまで獨逸文學には僅の少ししか交渉をしませんでした、而してシルレル、ゴエーテ、ウィーランド等の名を私は今になつて始めて覺え始めたのであります。

獨逸文學に於ても亦私は他の多くのものに於けるが如くでありました。私は私に來る內的影響を私の內的生活に完く織り込んでしまうかも左もなくば全然この獲得を棄て去つてしまうかしなければなりませんでした。この特殊な氣質を持つてゐたものですから私は心的材料の制限された少量をしか味得することが出來ませんでした。

父の圖書室は再び搔き廻されました。

私は自分の爲めになる本をあまり探し出すことは出來ませんでした。何故ならば圖書室には主に神學に關する著書が藏されてあつたのです。

けれども私は十年許前にゴータで公にせられた一書を非常な喜びを以て占有しました。それはすべての科學及び美術の區分に亘つての概論でありました。而して數種の化學及び諸種の文學に關する簡潔な概要が揭げてありました。

その排列は學者達の普通の區分に從つて居りました。けれどもそれは長らく私の望んでゐた人智の全體に關する概念を得る助けとなりました。而して私はこの「世界文學一覽」(これがその本の題名です)を得たことを本當によろこびました、私は出來るだけこの本を利用しやうと決心しました、而してこの決心を實行することに取り掛けました。

三十四、雜誌購讀

父の取つてゐた數種の雜誌から科學的の種々な拔萃を集錄して置くために私はその頃既に一種の日記をつけ始めてゐました、(父はこの目的のために他の牧師や敎育ある人々と雜誌購讀會を組織してゐたのです)

この雜誌の體裁は決つて居りませんでした——何でも材料が寄るまゝにそれからそれへと揭載し

て居りました。それがためにこの雜誌の利用といふことは至つて不便でありました。が併し私は一家の計畫に基いた科目分けの有利なことを認めまして早速方法の計畫を案出しました。

私は覺えて置く價値のあると思つた記事、大摑みな言ひ方をすれば紳士に必要な記事、それから私自身の要求のために特に必要であると思つた記事はすべて集める事にしてありました。而してこの豐な寶は何時でも都合のいゝ場合に又必要な時にその抄集から引き出し得られるやうになつてゐました。私は漸次私の心内の鋭くなつて行く知りたいといふ欲求が更に充分研究するやうに常に私を促す事柄の概念を得たいと望みました。

私は私の仕事に幸福を感じました。而して私は既に數日の間といふもの朝疾くから夜遲くまで鐵格子の嵌つた窓のある小さな離れで私の仕事に傍目もふらずに精を出して居りました。すると私の父が突然思ひ掛けなくもその室へ歩んで來ました父は私のした事を見ました。而してそれに用ゐた紙の山に目を附けました。まつたくその紙の量といつたら尠くはなかつたのであります。

そゝくさと眺め渡したゞけで父は私の仕事を時間と用紙の愚劣な費消である決めてしまひました私の味方になつて屢々擁護者となつてくれる父の兄(クリストフ)が若しその時訪ねて來てゐてくれなかつたら自分の好むことをするといふことはその時かぎり全然終つてしまつたかも分らないと思ひます兄はオーベルワイスバッハから數時間で達せられる所で牧師をしてゐたのです。而してこの時は兩親の家へ泊りに來てゐたのです。父は直ちに兄に實のところ害は無いとはいへ無用な仕事に就て考へてゐることを話しました。併し兄はそれに就ては異つた見方をして居りました。

私はそれ故に父の默許を得て無理に引續いてそれを行つてゐました。而してこの仕事はまつたく私のために實際の役に立ちました。それは私に最

も有益な影響を與へる或る一定の秩序と幅員と堅固とを私の思想に齎しました。

三十五、園藝作業

私の父は今や私の天分に從つて一定の地位を私に與へやうと骨を折りました。兎も角或る地位に私を近かせ得る關係のある活動的な仕事を附與したいと考へたのです。而してこの目的のためには誂へ向きの機會が直きに出來て來ました。

父の親戚の或者がヒルドブルグハウゼン地方に執事任せにしてある土地を所有して居りました。父はこの親戚と親しくしてゐましたので私はこの執事の下で實地に園藝を研究することが出來ることになりました。

私は其處で普通の園藝作業を皆と一緒になつて行ひました。しかし是等の作業はあまり私の興味を惹きませんでした。而して私が若し私の性質を理解してさへゐたならば私がまるきり柄にない仕事を見附けたことに氣が附いた筈なのです。

その頃私の胸に一番苦痛であつたことは私と父との間に心の理解が缺けてゐたといふことであります。

同時に私は父を尊敬しない譯には行きませんでした。父は高齡に達してゐるにも係らず身心共に强壯で且つ健全でありました。談話や相談などをする時にも頭ははつきりしてゐましたし、物事を成し遂げたり實際的な仕事をする場合には氣力は旺盛でありましたし、演說の時には熱心否固苦しくありました。父は確乎たる鞏固の意志を持つて居りました。同時に高尙な自己犧牲の努力を以て充たされて居りました。

父は善と信じたことは何處までも爭ふことを決して避けませんでした。

父は軍人が劒を使ふやうに眞のために善のために將又正のためにペンを働かせました。

私は父が漸次年を取つて死期に近いて行くことを知りました。而して尙父に自分といふものを理

解されないのが悲しうございました。

父は私を愛しました。而してこの愛のために大層結果がよいといふことを感じました。そこで私は父の許へ手紙を送らうと決心しました。手紙で自分で分つてゐるだけの自分の眞性を父に知つて貰はふと思つたのです。

長い間私はこの手紙のことを心に繰返しました私にはそれを書くべき力も勇氣も出て來ませんでした。

三十六、父の死

しばらくして父の許から手紙が來て十一月に私は歸宅することになりました。田舍の地所で數月働いた後でありました。

私は今や全く弱り果て殆んど窶た切りになつた父を助けるために呼び戻されたのでして。何はともあれ父の手紙を書く手助けをしました。

家族的其他の配慮及び生活の繁忙が私の時間の全部を奪つてしまひました。

私が手紙で實行するやうに書いたことは今や幸ひにも人々の談話に於て、眼から眼へのひらめきに於て實行が出來るやうになりました。

父は死ぬまで私の未來の出世を心にかけて居りました。

父は一八〇二年の二月に此の世を去りました。父の光ある御靈の、筆を執りつゝある我の上を完き平和と祝福とを以て看守り給はんことを。斯くまでに卿を愛せる卿の息子に意を安んじ給はんことを。

三十七、森林局の書記

私は今やあらゆる點に於て自分の身を自由にすることが出來ました。而して私の周圍の事情に從つて自分で未來の生活の方向を決定することが出來ました。

この自然の過程を以て私はもう一度イーステルの親の家を去りました。バムベルグの監督組織地方の普通行政部(出納局、森林局、稅務局に分る)

の一部をなしてゐる森林局に書記の地位に就くためでありました。

私の地方は通常ならぬ美しい景色の中に横つて居りました。

私の職務は輕くありました、而してそれが濟んだ時には私は近所を自由にぶらつきました。

春になると景色は更に美しくなりました、私は自由な生活を送つて智と情とに力を得ました。

斯くて私はもう一度戸外で多く暮すくやうになり自然を友にして生活しました。

私の長官は藏書の多いのを誇つて居りました。で私はこれを利用しました。斯くて當時の印版に附せられた刊行物の中で、私の選んだ職業に關係のある事柄を取扱つてゐるものゝ多くは他の刊行物と共に私の手に入つて來ました。

私は古代並びに近代の著作家や思索家から選ばれた、行爲に關する金言、思想、觀察を載せてゐる書籍を殊に興味深く感じました。

私の性格は成長して是等の金言に結びつけられました、私は是等の金言を何物よりも容易く理解し覺えることが出來ました。そして私は私の生活や思想に是等の金言を織り込みました。而してこれによつて私の行爲を檢べてみました。

私は私の内的生活に極く親密な調和を持つてゐる金言を抄錄して置きました。そしてそれを常に自分の身に體して居りました。

是等の四圍の事情の他に私の生活は成長の多くの要素を持つて居りました。

私の長官はその家族と兵に熱心なローマン、カトリック教信者でありました。彼はカーラス教授の推薦してくれた家庭教師を選擇採用しました。

この人は多くの優れた性質を持つて居りました、それですからこの人と私は直きに大層仲がよくなりました。

私達は二人とも尙當時帝國の封土であつた淸教徒の住んでゐる隣村の醫者とか牧師とか學校教師

とかの家族の如な上品の人々と知合ひになれるといふ愉快を持つて居りました。

私の友なる家庭教師は生々とした研究心に富む若い人でありまして殊長距離の旅行の計畫や教育に關する包含多き企劃を作ることを好んで居りました。

私達の交際や生活は甚だ信頼的で且つ打ち開けたものでありました何故ならば彼が好んだ事柄は私にも亦親しいものであつたからです。けれども私達の性質は絶對的に相反して居りました。

彼は學者的に訓育された人でした、然るに私は纔かばり教育を受けてゐるのでした。

彼は世間や社會との葛藤の中を潜つて來た青年でありました。私の思想は如何にして自ら安んじ又他の人々と折合つて行くべきかといふことに在りました。且又私達の外的生活は眞の親密な友情が私達の間に存在することの出來なかつたやうな相異つた諸相を帶びて居りました。

けれども私達の相異そのものこそ私達を思つたよりも親密に結ひつけてくれました。

當時に於ては實地の陸地測量が主として私に興味を起させました、それは戸外生活に對する私の愛を直ちに滿足させてくれ而して私の智を充分に働かせることが出來たからであります、けれども私もなさなければならないやうになつた小歇みのない散し書きをすることには他の樂しい生活があつたにも係らず私は長らく堪えてゐることは出來ませんでした。

三十八、陸地測量師

一八〇三年の春淺き頃、私は私の地位から去つてバムベルグに行きました、バムベルグがババリヤに交付され從つて同地方の一般的の測量が必要になるべき政變が直きに私の能力に適した仕事の地位を確かに供給してくれるだらうと思つたのです、

私の豫期は充たされませんでした。

種々と計畫を實行しやうとして私はバムベルグの陸地測量師に面會しました、而して直ちに彼等の一人から雇はれることになりました。

その人はそれまで多くの測量を手掛けて居りました、而して尙測量に從事して居りました、

私が地圖の製作に熟練して居ることを現しましたのでその人は測量に伴ふ必要な地圖の準備を私に任せました。このことが私の要求に對してはかなり割のいゝ仕事にしばらくの間私を雇はれさして置きました。

新政府の差詰めの問題は勿論陸地測量師の任命でありました。そして町に住つてゐた人々は彼等の仕事の見本としてバムベルグの地圖を提出するやうに慫慂されました。若い頃に嗜んだ敎へによつて私は斯樣な仕事に不馴れではありませんでした、そこで私は地圖を描いて樂しみました、私はそれを提出しました。

私の作は賞讃されました。而してそのために私は何か貰つたのでありました。けれども他鄕人で無經驗で若くて而してまた自分の望んだ目的に對して最善の方法を致さなかつたので私は任命を受けませんでした。

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回五日發行）
婦人と小ども　第十四卷第三號　大正三年三月五日發行

幼稚園用品

家庭用玩具

東京九段

フレーベル館

新築後工場も整頓致し店も精々片付き申候間益々
業務に奮勵仕り品物を精選し價格を最も低廉に御
需に應じ可申候に付倍舊の御愛顧を願上候

日本玩具研究會
會員募集

會費は一ケ月五拾錢にて研究した面白い御爲めになるよい玩具が毎月得られます（申込次第規則書送る）

本會評議員

巖谷小波　甲賀藤子　吉田熊次
多田房之助　野口ゆか　倉橋惣三
黒田定治　久留島武彦　山脇春樹
町田則文　小西信八　三土忠造
三輪田元道　莊司市太郎　森村開作

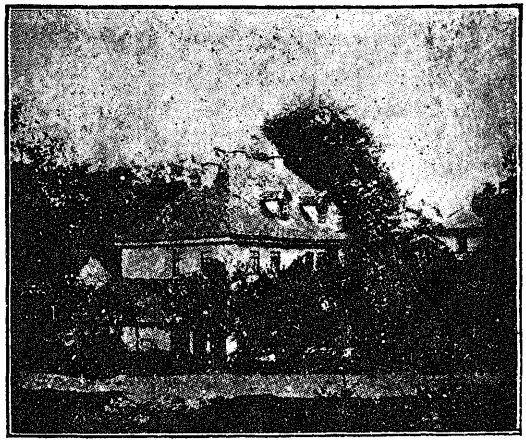
本會幹事

稲垣知剛　和田實　河野清丸
高市次郎　曾根松太郎　武藤忠義
野村忠寛　松田茂　藤五代策
岸邊福雄　御園生金太郎

申込所　東京九段　日本玩具研究會

印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回五日發行）
婦人と子ども　第十四卷第五號　大正三年五月五日發行



ブランケンブルグにおけるフレーベルの家

印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場